

# 瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT  
2025.2. VOL.55

contents  
極 社会貢献 Social contribution      人 時の人 People in the news      技 研究 Current topics in research      和 お知らせ Information

## 日本初の乳がんプラットフォーム試験を開始

### S-FACT (JCOG2205) 試験: 周術期乳がんを対象とした 新規薬剤開発に関する持続的なプラットフォーム試験

日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)が周術期乳がん患者を対象とした新規薬剤評価のための「S-FACT試験」を開始したことを報告しました。本試験の研究統括者を臨床研究戦略部の岩田広治特任教授、研究事務局を能澤一樹特任講師が担当しています。

S-FACT (JCOG2205) 試験は、日本初の乳がん領域における医師主導のプラットフォーム試験で、新規薬剤を迅速かつ効率的に評価することを目的としています。この試験は、国立がん研究センター中央病院が支援する日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)の基盤を活用して実施され、乳がんの新規治療法開発を加速させる新たなシステムを構築します。

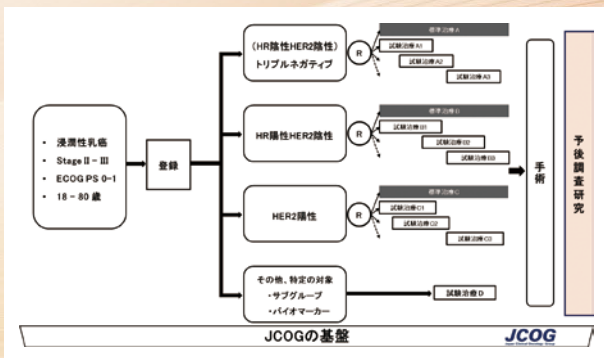
プラットフォーム試験の特徴として、単一の疾患に対して複数の治療法を同時に評価可能で、試験期間中に新たな治療法の追加や除外が可能な柔軟な仕組みを採用しています。S-FACT試験は、臨床病期Ⅱ期またはⅢ期の乳がん患者を対象に、術前化学療法の有効性を評価することを目的としており、患者の乳がんサブタイプごとに標準治療と試験治療を比較する設計です。初回のコホートは、HR陰性HER2陰性のトリプルネガティブ乳がん患者を対象としています。

背景として、従来の個別試験では時間とリソースが分散される課題があり、また日本ではドラッグ・ラグやドラッグ・ロスといった新薬開発の遅れが乳がん領域で懸念されていました。S-FACT試験はこれらの課題に対応し、新規薬剤を迅速に日本の乳がん患者に届けることを目指しています。

試験の評価項目には、病理学的完全奏効(pCR)割合、ctDNAクリアランス割合、安全性が含まれます。研究統括者は岩田広治(名古屋市立大学)、研究代表者は米盛勸(国立がん研究センター中央病院)で、複数の医療機関が参加しています。

この試験を通じて、乳がんの新規治療開発が促進されるだけでなく、血液中のctDNAを活用した治療戦略の確立が期待されています。また、この取り組みは乳がん以外のがん種への応用も視野に入れており、日本の乳がん患者に迅速かつ効果的な治療を提供する重要なステップとなります。

文責：臨床研究戦略部 岩田 特任教授・能澤 特任講師



試験デザイン



2024年11月5日名古屋市立大学での記者会見とプレスリリース

## “瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。



## X線防護衣のインナー補助具の開発

私が専門とする胆道・膵臓領域の消化器内視鏡治療は、長時間の内視鏡処置に加えX線を併用します。X線から私たちが被ばく（「職業被ばく」と呼びます）するので、約3-7Kgの放射線防護衣を長時間着用します。その影響で、私たちは肩こりや腰痛（MSDs）に苦しんでいます。実際、79.1%の内視鏡医がMSDsを1年以内に自覚し、内17.3%が業務離脱を余儀なくされているというデータもあります。

そのMSDsを軽減するために何かできないか？ということで、私たちが働きやすくなるための学問である「人間工学（産業医科大学 榎原教授）」、モーメントを応用した荷重負荷分散を行う「機械工学（法政大学 山田准教授）」専門家と医工連携して、X線防護衣インナー補助具（カタササエール®）を開発しました（国際特許申請中）。これは肩にかかる荷重を約30%に軽減し、残りを姿勢矯正のための力に変換することができます。私たちの健康を守ることで培った技術を次世代へ継承できます。また同様に放射線防護衣を長時間着用する他の診療科（循環器内科、放射線科、脳神経内・外科、整形外科など）にも応用できます。

この活動は日本消化器内視鏡学会の附置研究会にも採択され（内視鏡関連MSDs予防のための人間工学的対策研究会：<https://www.jges.net/conference/2024-81715>）私も事務局として活動中です。より良い医療を継続して提供できるよう、これからも精進します。



文責：名市大病院 肝・膵臓内科 堀 寧 助教

## 医学部一年生の臨床実習について

今年度から医学部低学年生の臨床実習が始まり、1年生は4日程にわかれて名市大病院で外来診療の様子を見学させて頂きました。

学生たちは、「医師になる道Step1」という科目の中で、医師と患者の関係性や患者さんの“病いの語り”について学んだ上で外来を見学しました。以下はふり返りの記載の一部です。「患者さんが病気と関係ないように思えることを話していても、必ず電子カルテを打つ手を止めて患者さんの目を見て頷きながら聞いていました。このようなことから話しやすい雰囲気が生み出されるのだと分かりました。」

学生たちは医師・医療者としてのスタートでとても貴重な経験をさせて頂きました。ご協力頂いた先生方、看護師さん、スタッフの皆様にご心からお礼を申し上げます。

文責：医学部医学教育センター、医学・医療教育学 高桑 修 教授

名古屋市立大学病院では  
将来の医療を担う医学生が  
臨床実習を行っています

よい医師になるためには  
講義だけでなく診療現場での学びが必要です。

本日、10時30分～11時30分ごろまで  
医学部1年生が  
外来診療の見学を行なっています

ご理解とご協力をお願いします  
学生の見学を望まない場合は検査室等にご連絡ください

お気づきの点がございましたら、患者相談窓口にご相談ください  
名古屋市立大学病院 院長

## 新任教授紹介

### 分子腫瘍学 田口 歩 教授

2024年10月より医学研究科分子腫瘍学分野教授を拝命いたしました田口 歩です。私は1997年に名古屋大学医学部を卒業し、消化器内科医として臨床に従事しておりました。2005年に医学博士号を取得後、がん研究者を目指して名大医学部分子腫瘍学(高橋隆教授)の門をたたき、また2008年にフレッドハッチンソンがん研究センター(Dr. Samir Hanashラボ)に留学しました。以後、2013年よりJMDアンダーソンがんセンター、2018年より愛知県がんセンターで研究室を主宰してきましたが、タンパク質のプロファイリング(プロテオミクス)を中心に、がんの早期発見・治療個別化に有用な血液バイオマーカーの探索、新規がん治療標的分子の探索という、臨床応用を強く意識した2つの研究テーマに一貫して取り組んでおります。今後も、名古屋から世界をリードするがん研究を展開し、がんの克服を目指します。ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく願い申し上げます。



田口 歩 教授

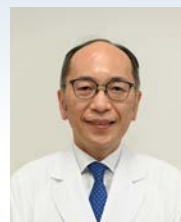
## 新任教授紹介

### みらい光生病院 泌尿器科学 青木 芳隆 教授

2024年9月1日付で、名古屋市立大学医学部附属みらい光生病院泌尿器科教授を拝命いたしました青木芳隆です。このたびのご縁に深く感謝申し上げます。

私は1993年に福井医科大学(現・福井大学)を卒業後、同大学の泌尿器科に入局し、倉敷中央病院などで診療や臨床研究に取り組みました。水腎症を発症するId2遺伝子欠損マウスの解析で学位取得後は、泌尿器科領域の国際疫学研究チームの一員として系統的レビュー等にも携わりました。臨床面では、長期留置尿道カテーテル抜去バス作成や、県と協力した遠隔医療など、高齢者の排尿障害に取り組む、多職種連携による排尿ケアの普及に努めてきました。

今後は、名古屋市の超高齢社会に向き合い、「みらい光生病院」の名にふさわしい医療を提供し、この地の未来を支える取り組みを地域と連携しながら発展させ、全国に発信していきたいと考えております。皆様のご指導を賜りますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。



青木 芳隆 教授

## 時の人

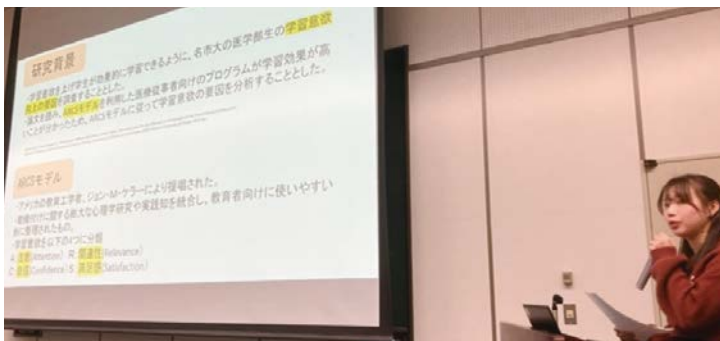
### 基礎実習発表会 (11月22日開催)

医学部3年生は9月から12月にかけて学内外の研究室に配属され、実際に自ら手を動かしながら基本的な研究技法やリサーチの進め方を学び、リサーチマインドを涵養します。11月22日に研究成果発表会が開催され、学生たちは学会さながらの雰囲気の中、3ヶ月間に自らが行った研究の成果を発表しました。

厳格な審査の結果、以下の4名が優秀賞に選出されました。

服部蒼生さん(免疫学分野)、橘遼太郎さん(細胞生理学分野)、相村むつみさん(法医学分野)、嘉戸俊介さん(認知症科学分野)。

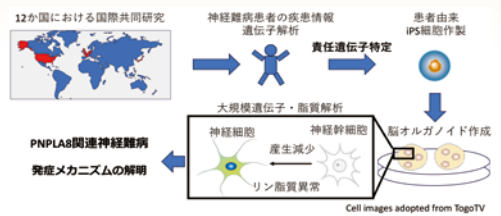
研究のさらなる発展を祈念いたします。ご指導いただいた先生方、ありがとうございました。(写真は発表会当日の様子。受賞研究とは関係ございません)



文責：基礎自主研修2024年度幹事、医学・医療教育学 高桑 修 教授

### 脳オルガノイドで、小児神経難病の病態メカニズムの解明 —ヒト神経幹細胞の減少を引き起こす責任遺伝子の発見—

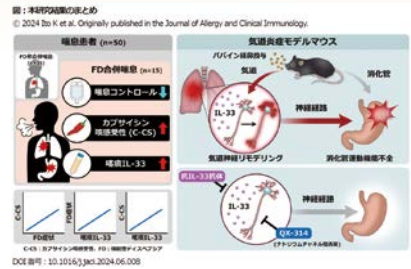
小児の希少疾患は、診断が難しく、原因が不明なものがたくさんあります。私たちは、12か国の国際共同研究で、発達性・変性てんかん性運動障害性脳症を伴う患者の遺伝子を解析して、PNPLA8遺伝子が重要であることを解明しました。疾患メカニズム解明のため、iPS細胞から作成した3次元脳培養モデル（脳オルガノイドモデル）を作成しました。PNPLA8がないと、ヒトに豊富にある神経幹細胞が減少し、リン脂質代謝に異常が生じ、疾患を発症する可能性を示しました。これらの結果は、希少疾患の治療法開発につながるかと期待されます。研究成果はBrain誌に掲載されました（PMID: 39082157）。



文責：新生児・小児医学分野 齋藤 伸治 教授、細胞生化学分野 加藤 洋一 教授、嶋田 逸誠 講師

### 喘息に併存する機能性ディスぺプシアの臨床的意義を解明 —咳・咳感受性とディスぺプシア症状との関連を明らかに—

喘息患者は、しばしば、胃もたれ、早期満腹感、心窩部痛といった消化器症状（ディスぺプシア症状）を訴えます。私たちは喘息患者のデータベースから機能性ディスぺプシア（FD）合併喘息では吸入カプサイシンに対する咳応答（カプサイシン咳感受性）が亢進していることを明らかにしましたが、喘息とFDを結びつけるメカニズムについてはよく分かっていませんでした。そこで、FD合併喘息患者を対象とした臨床研究と喘息モデル動物を用いた解析を行い、気道のインターロイキン-33が喘息患者のカプサイシン咳感受性亢進やFD症状に関連し、気道神経リモデリングや胃排泄能の遅延に関連する因子であることを初めて報告しました。



文責：医学研究科 呼吸器・免疫アレルギー内科学 金光 禎寛 講師

### 【感染症学】伊東教授が参加する研究班が 『免疫不全者におけるCOVID-19の臨床対応指針案』を公開（令和6年9月20日公開）

COVID-19は2023年5月8日に感染症学上の位置付けが5類感染症へ変更されましたが、免疫不全者に対するCOVID-19の臨床対応には依然として多くの困難が伴っており、何らかの「指針」が求められる状況が続いていました。しかしながら、参考となる研究データが限られていることから、現時点で免疫不全者に特化したCOVID-19の指針やガイドラインは、関連学会等から未だ発表されていませんでした。

こうした状況を受けて、我々、AMED 新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業の研究班（研究課題名：長期ウイルス排出COVID-19患者の臨床的・ウイルス学的・免疫学的特徴解明と臨床対応指針案の作成、研究代表者：鈴木忠樹）では、これまでの研究で得られた知見と2024年5月までに蓄積されたエビデンスを整理しました。その上で、研究班外部の専門家による査読を経て、「免疫不全者におけるCOVID-19の臨床対応指針案」として取りまとめました。

本指針案が、日々の診療に尽力されている医療従事者の皆さまにとって有益な情報となることを願うとともに、免疫不全者におけるCOVID-19の課題が広く共有されることで、関連学会等において建設的な議論が進捗することを期待しております。

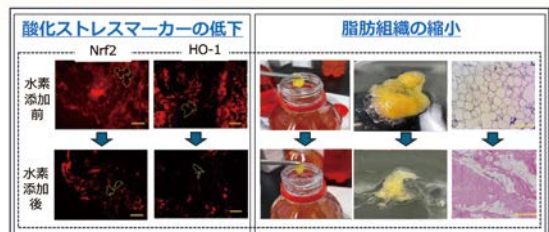
文責：東部医療センター 感染症学 伊東 直哉 教授



### 水素ガスは脂肪組織の病態を改善する ～ヒトの脂肪組織を用いて水素投与療法のメリットを証明～

近年、水素ガス吸入療法は心停止後症候群や急性心筋梗塞の治療法として注目されています。そこで我々は、心臓血管外科手術時に採取したヒトの皮下脂肪組織に高濃度水素を投与し、酸化ストレスの低減、脂肪細胞の縮小、悪玉アディポサイトカイン「ケメリン」の抑制効果を世界で初めて証明しました。この成果は、水素が脂肪組織へ直接作用する基礎データとして重要であり、循環器疾患や肥満、メタボリックシンドロームといった生活習慣病に対する治療法として、将来の水素吸入療法の臨床応用につながる成果であると考えています。

文責：医学研究科 心臓血管外科学 山田 敏之 講師





### ドクターカーの試行運用開始／名市大病院

名古屋市立大学病院では、2024年9月9日(月)救急の日から、平日日中の時間帯に限定してドクターカーの試行運用を始めています。

ドクターカーは、名古屋市消防局との協定に基づき、119番通報の受付を行う防災指令センターからの要請を受けて緊急走行で出動し、消防隊員と一緒に活動します。医師等が救急現場に駆けつけることで、これまで病院内でしか行うことのできなかった処置や検査をすぐに行うことができるようになります。また、救急現場と病院の間で迅速な情報共有がなされるため、病院到着後の治療も素早く開始され、傷病者のさらなる救命率の向上と病態悪化の防止に繋がることが期待されています。

これらにより、「市民の安心感が増す」という声をいただいていることから、2025年度以降は、市内で他に実施されていないドクターカーの“24時間体制”での本格運用を目指し、病院一丸となって、地域のさらなる救急医療への貢献に努めてまいります。



ドクターカーと隊員

文責：名市大病院 エステーション運営室

### 東海がんプロセミナーを開催しました

12月14日に東海がん専門医療人材養成プランの一環として、医療従事者向けセミナーを開催しました。令和5年度から開始されたこのプロジェクトには本学や名古屋大学をはじめ、東海圏にある7大学が参画しており、大学院生や医療従事者向けに様々な取り組みを行っています。本学主催の第1回目のセミナーとなる今回は『患者目線でのがん緩和ケアの進歩』をテーマとし、あすなろ医院の渡邊紘章先生には在宅緩和ケアにおける支援の実態を、国立がん研究センターの藤森麻衣子先生には研究データに基づいた患者への意思決定支援についてご講演いただきました。ハイブリッド開催で100名以上の方にご参加いただき、「自身の役割を改めて見直すきっかけとなった」「がん患者とのコミュニケーションという言語化しにくいことを、科学的に学ぶことができた」等の感想をいただきました。名市大がんプロは今後も積極的に『がんプロフェッショナルの養成』に取り組みます。



文責：医療人育成課・臨床腫瘍部 小松 弘和 教授

### 高度医療人材養成拠点形成事業の開始について

文部科学省の「高度医療人材養成拠点形成事業(高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援)補助金」を活用し、「医師の働き方改革」が進められる中、研究活動をサポートできる人材の育成を行う事業を、「東海臨床・基礎融合研究ジュニアスペシャリスト育成のためのOJTプログラム」として名古屋大学と共同で開始することになりました。

本事業は、スチューデントアシスタント、ティーチングアシスタントとして採用された医学生及び大学院生が、教員の指導の下、研究者が実施している研究にOn the Job Training(OJT)として参画し実践的に研究スキルを上達させることで、研究者である診療科教員の業務負担を軽減すると同時に、高度な臨床研究能力を有する医師の養成を目指すものです。

事業担当の教員が「研究サポート推進室」を運営し、毎年10名の医学部生・大学院生を養成していく予定です。



文責：医学研究推進課

### 子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)キャッチアップ接種を実施しました／名市大病院

2024年8月から9月にかけて、子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)キャッチアップ接種(1回目)を実施しました。

このワクチンの接種により、子宮頸がんの原因となるHPVの感染を防ぐ効果が示されていますが、今回のキャッチアップ接種は、2013年から2021年まで個別に接種を勧める取り組みが一時的に差し控えられていた当時の定期接種対象者(小6～高1)向けに2022年4月から3年間に限って接種費用の自己負担なし(全額公費)で接種が受けられるものです。

名市大病院では、キャッチアップ接種勧奨啓発の一環として、事前の意向調査により接種を希望された病院職員や本学学生58名に対して接種の機会を提供しました。

1回目接種の初日となった8月28日には、報道機関の取材も入り、新聞やテレビでも大きく取り上げられました。その後、11月に2回目接種を実施し、今後は2025年3月に3回目接種を行うことになっています。

文責：名市大病院 管理課



### 2024年度、附属病院の臨床研修フルマッチ達成

2025年度の卒後臨床研修マッチングで、名古屋市立大病院は昨年に続き、3年連続フルマッチを達成しました。この成果は、当院の初期研修プログラムの魅力が広く認知された結果と考えています。当院では、4つの研修プログラムを提供しています。1)2年間の大学初期研修、2)連携病院とのたすきがけ研修、3、4)小児科・産科婦人科重点研修コースで、個々の研修医のキャリアプランに応じた研修が可能です。特に、たすきがけ研修では、一年目を連携病院で行うことにより、一般的なcommon diseaseに関する経験を多く積み、二年目には本学に戻り、難治性疾患や希少疾患の学習を通じて、幅広い疾患や治療の経験を積むことができる点が評価されているようです。また、メンター制度を通じて研修の進捗状況の把握や総合的トータルサポートを行うなど、きめ細かい研修医ケアにも力を入れています。今後は、初期研修修了後も本学に残って専門研修を続ける専攻医が益々増えるよう努力して参ります。



文責：総合研修センター センター長 村上 英樹

### 芸術を通して患者ケアに取り組んでいます！

### 一青窈さんコンサート・ホスピタルピアノ・ヘルスケアアート／名市大病院

2024年8月23日に、歌手の一青窈さんにお越しいただき、音楽ライブを開催しました。代表曲「もらい泣き」「ハナミズキ」を含め全5曲を披露していただきました。

また、2024年9月6日からどなたでも弾ける「ホスピタルピアノ」として一般開放することになりました。平日の14時から16時まで開放しており、連日たくさんの方に患者さんを癒す演奏をしていただいております。アトリウムにお立ち寄りの際はぜひ鑑賞してみてください。

さらに、2024年9月13日、14日に、パリで活躍するアーティストMathias Bensimon(マティアス ベンシモン)さんと当学の芸術工学部の学生による患者さんや来院者、医療従事者のためのヘルスケアアートパフォーマンスを行いました。(右図参照)

これからも名市大病院は芸術を通して少しでも患者さんに癒しを与えられるよう取り組んで参ります。



文責：名市大病院 経営課



# 04 お知らせ Information

## 水谷孝文賞自己研鑽助成費授与式を行いました

名古屋市立大学病院初期臨床研修プログラムでは、故水谷孝文先生(名古屋市立大学医学部同窓会初代会長)・水谷浩明先生(八事病院理事長)の御厚意により、研修医育成基金をいただきながら、当院の初期臨床研修を充実したものにすべく努力しています。その基金は研修医の学会参加や発表研究の論文文化に必要な資材や機材の購入に利用させていただいています。そして、当院での研修に熱心に取り組んでいる研修医に対して、水谷孝文賞を授与しています。令和6年度も4名の研修医が水谷孝文賞に選出されました。4名の受賞者は12月2日に開催された初期研修フォーラム2024に出席し、それぞれの研修生活の様子を示すプレゼンをしました。受賞された4名の先生方には、今後さらに研鑽を積み重ね、名古屋市立大学の一員として医学の発展に大きく寄与されることを期待します。

文責：総合研修センター センター長 村上 英樹



## 医局、教授室の工事が始まりました／東部医療センター

当院は、大学病院化以降、診療体制の強化に加え、教育、研究体制の充実を進めております。教授を含む教員の増員に対応し、大学附属病院としての使命を果たすために、新たに医局、教授室、研修医室、研究室、図書室、臨床研究開発支援センター東部分室を教育・研究棟(旧東病棟)に整備します。

新たな医局は、医学研究科に倣い診療科毎に教授室、医局をまとめて設けます。また、基礎研究の推進を目的に研究室を新たに設けます。その他カンファレンスやリサーチミーティング等での利用を想定した共用の多目的スペース、会議室を併せて設けます。

令和6年12月より工事を開始し、令和8年6月頃の供用を目指します。医師はじめスタッフにとって教育、研究に相応しい環境となるよう整備を進めて参ります。

文責：東部医療センター 病院長 大手 信之



完成後の医局、共有の多目的スペースのイメージ図

## 「いいお産の日」のイベントを開催しました／西部医療センター

2024年11月3日、語呂合わせで「いいお産の日」のイベントを西部・東部医療センターの助産師にて合同で開催しました。

このイベントは、病院助産師と市立看護専門学校教員の有志が、「いいお産についてみんなで考える日」をモットーに地域との連携や活動の広報を目的としてスタートしました。時代に合わせて内容を変えながら今年ついに20年目を迎えました。

今年は感染対策を講じながら対面の関わりを重視した9つの体験型ブースと、オンラインで参加できる3つのZOOMクラスを企画し、例年より多くの市民の方にご参加いただけました。もく浴練習や乳幼児蘇生では新米パパが熱心に取り組む姿が見られ、助産師が熱演するお産劇では笑いあり涙あり、お産や育児について家族で考える機会を提供することができたと考えています。イベント開催にご尽力いただいた多くの方のサポートに感謝いたします。

文責：西部医療センター-3階東病棟 主査 絹田 結香



## 2管球CTと研究力で地域医療に貢献する／みどり市民病院

みどり市民病院ではCT装置を2管球CTに更新し、2024年12月より運用を開始致しました。2管球CTは、2006年に名古屋市立大学病院でアジア初の機器として導入され、現在は、みどり市民病院をはじめ、名古屋市立大学病院、東部・西部医療センターの診断用CTとして活躍しています。1管球CTと比較して、2管球CTは2倍の高速撮像により、当院における地域包括ケアや救急医療において、呼吸を止められない患者様や動いてしまう患者様でも、動きによるボケのない診断価値の高い画像を提供できるようになりました。また、みどり市民病院放射線技術科では、附属病院化以降CT技術における最先端の研究を継続しており、日本CT技術学会において優秀研究発表賞(2023)、最優秀研究発表賞(2024)の2年連続受賞や、2024年のCT撮影技術コンテストでのグランプリ受賞などCT検査におけるトップランナーである実績を生かし、新しい2管球CTを用いて地域医療に貢献していく所存です。



文責：みどり市民病院 経営課

## 名東図書館で地域連携講座を開催しました／みらい光生病院

みらい光生病院では、名東図書館との連携により、9月から11月にかけて同館で全3回の地域連携講座を開催するとともに、病院を紹介するコーナーを設けました。地域連携講座では、各医師が専門分野の視点から、健康寿命をのばす生活習慣や日常生活における健康管理のポイントを説明しました。定員を超えるほどの方にご参加いただき、「分かりやすい説明で大変参考になった」と好評をいただきました。みらい光生病院では、「健康寿命日本一の名古屋」を目指す医療を地域と連携して提供するという理念のもと、今後も地域から信頼され愛される病院となるよう努めてまいります。



地域連携講座の様子



病院紹介コーナーの様子

文責：みらい光生病院 経営課

## スーパーカーに乗ったサンタさんがやってきた／名市大病院

令和6年12月22日、名市大病院の9階南病棟(小児病棟)の子どもたちを元気づけるクリスマスイベントが開催されました。イオンモール熱田で開催されたスマイルリターン様主催イベントTOYRUN FOR KIDSの一環で、スーパーカーに乗ったサンタさんが名市大病院にやってきて、病棟に入院している子どもたちにお菓子やおもちゃなどのプレゼントが手渡されました。併せて、イオンモール熱田会場の「病気とたたかっている子どもたちに応援のお手紙を書いてみよう!」コーナーで書かれたお手紙も渡されました。当院からは感謝状を贈呈するとともに、病棟の子どもたちがサンタさんへ書いたお礼のお手紙が渡されました。その後、子どもたちは病院駐車場に並んだスーパーカーと一緒に写真を撮ったり、スーパーカーの運転席に座ってみたりと楽しいひとときを過ごしました。

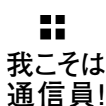


文責：名市大病院 経営課

広報誌：瑞医(ずいい)  
発行：〒467-8602

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地  
TEL(052)858-7116 FAX(052)851-4801

URL <https://www.nagoya-cu.ac.jp/>



広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!  
「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。  
ここそは、という方は、E-Mail: [hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp](mailto:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp)  
病院管理部経営課経営係 広報担当まで